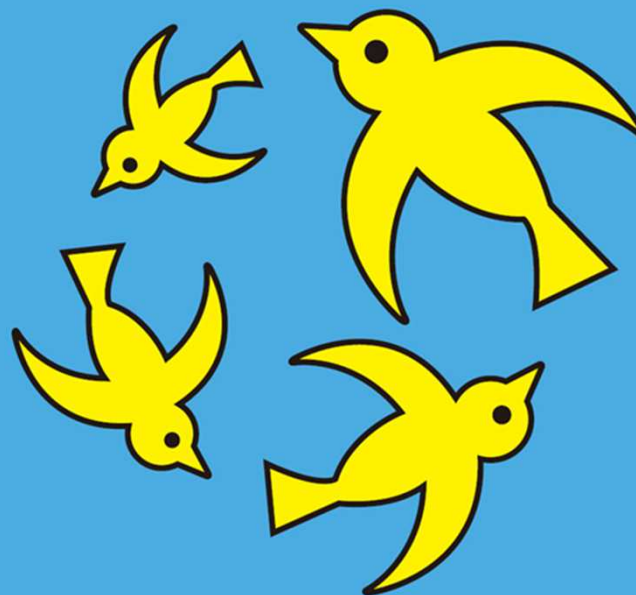


新しい学習指導要領

生きる力

学びの、その先へ



上代から近現代に受け継がれてきた

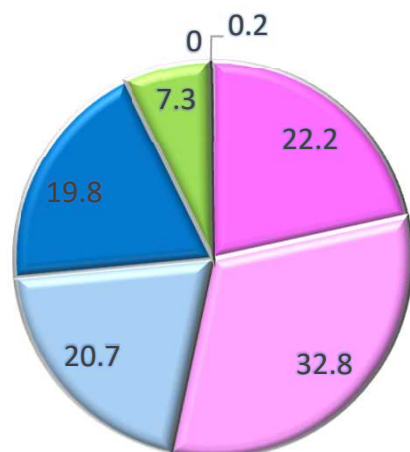
我が国の言語文化への理解を深める科目「言語文化」

～ 高等学校国語科の必修科目における漢文教育 ～

平成27年度 学習指導要領実施状況調査 生徒質問紙調査①

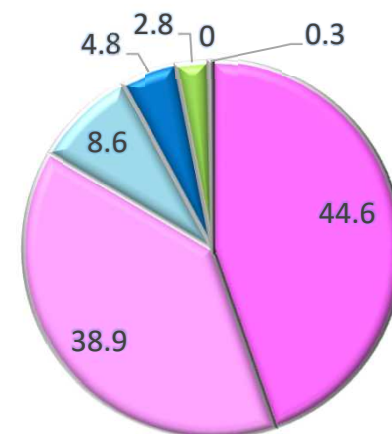


国語の学習が好きだ



- そう思う
- どちらかといえばそう思う
- どちらかといえばそう思わない
- そう思わない
- 分からない
- その他
- 無回答

国語の学習は大切だ



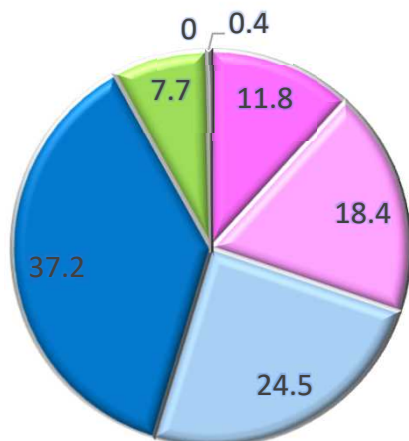
- そう思う
- どちらかといえばそう思う
- どちらかといえばそう思わない
- そう思わない
- 分からない
- その他
- 無回答

「国語の学習が好きだ」という質問に対して、「そう思う」、「どちらかといえはそう思う」と肯定的な回答をしている生徒の割合は55.0%であり、「国語の学習は大切だ」という質問に対して、「そう思う」、「どちらかといえはそう思う」と肯定的な回答をしている生徒の割合は83.5%であった。

平成27年度 学習指導要領実施状況調査 生徒質問紙調査②

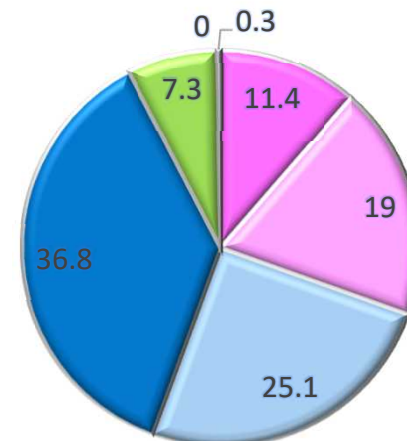


古文は好きだ



- そう思う
- どちらかといえばそう思う
- どちらかといえばそう思わない
- そう思わない
- 分からない
- その他
- 無回答

漢文は好きだ

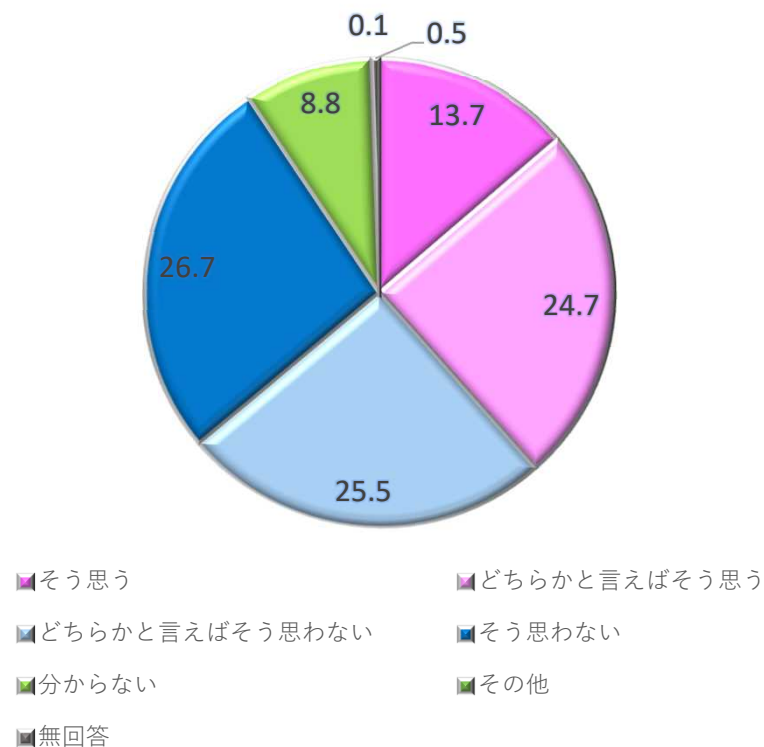


- そう思う
- どちらかといえばそう思う
- どちらかといえばそう思わない
- そう思わない
- 分からない
- その他
- 無回答

「古文は好きだ」という質問に対して、「そう思わない」、「どちらかといえばそう思わない」と否定的な回答をしている生徒の割合は61.7%であり、「漢文は好きだ」という質問に対して、「そう思わない」、「どちらかといえばそう思わない」と否定的な回答をしている生徒の割合は61.9%であった。古文、漢文に対して否定的に捉えている生徒の割合は60%を越えている。



古文や漢文の学習は大切だ



「古文や漢文の学習は大切だ」という質問に対して、「そう思う」、「どちらかと言えばそう思う」と肯定的な回答をしている生徒の割合は38.4%であり、古文や漢文の学習の意義については、必ずしも生徒に理解されていない。

※「国語の学習は大切だ」という質問には83.5%が肯定的な回答をしている。

平成27年度 学習指導要領実施状況調査 生徒質問紙調査 ④



「国語の学習が好きだ」という質問に回答した生徒の、ペーパーテスト調査の状況

回答状況	そう思う	どちらかと言えそう思う	どちらかと言えそう思わない	そう思わない	分からない	その他	無回答	合計
α冊子	60.7	58.8	55.1	52.7	47.8	59.3	32.1	56.7
β冊子	57.7	54.0	51.8	49.0	47.1	30.8	25.3	53.0

「国語の学習は大切だ」という質問に回答した生徒の、ペーパーテスト調査の状況

回答状況	そう思う	どちらかと言えそう思う	どちらかと言えそう思わない	そう思わない	分からない	その他	無回答	合計
α冊子	59.1	57.1	50.6	48.7	47.9	37.0	26.4	56.7
β冊子	55.9	52.9	46.6	44.0	45.4	39.1	31.5	53.0

「古文や漢文の学習は大切だ」という質問に回答した生徒の、ペーパーテスト調査の状況

回答状況	そう思う	どちらかと言えそう思う	どちらかと言えそう思わない	そう思わない	分からない	その他	無回答	合計
α冊子	61.2	59.0	56.4	55.0	50.4	77.8	40.6	56.7
β冊子	57.6	55.6	52.4	51.2	46.6	38.1	31.7	53.0



高等学校の国語教育においては、教材の読み取りが指導の中心になることが多く、国語による主体的な表現等が重視された授業が十分行われていないこと、話合いや論述などの「話すこと・聞くこと」、「書くこと」の領域の学習が十分に行われていないこと、古典の学習について、日本人として大切にしてきた言語文化を積極的に享受して社会や自分との関わりの中でそれらを生かしていくという観点が弱く、学習意欲が高まらないことなどが課題として指摘されている。

中央教育審議会「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（平成28年12月、p.127）

必修科目「言語文化」



「言語文化」については、主として「古典の学習について、日本人として大切にしてきた言語文化を積極的に享受して社会や自分との関わりの中でそれらを生かしていくという観点が弱く、学習意欲が高まらない」という課題を踏まえ、特にこうした課題が、古典を含む我が国の言語文化への理解と関係が深いことを考慮し、上代から近現代に受け継がれてきた我が国の言語文化への理解を深める科目
(「高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 国語編」P10)

目標

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の言語文化に対する理解を深めることができるようにする。
- (2) 論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし、他者との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。
- (3) 言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う。

(学習指導要領における)我が国の言語文化とは



我が国の歴史の中で創造され、継承されてきた文化的に高い価値をもつ言語そのもの、つまり、文化としての言語、また、それらを実際の生活で使用するによって形成されてきた文化的な言語生活、さらには、古代から現代までの各時代にわたって、表現し、受容されてきた多様な言語芸術や芸能などを広く指している。

必修科目「言語文化」では

文化としての言語、文化的な言語生活、多様な言語芸術等に重点を置き、理解したり尊重したりすることにとどまることなく、自らが継承、発展させていく担い手としての自覚をもつことを目指している。

「言語文化」の内容 ①〔知識及び技能〕



(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項

(1) 言葉の特徴や使い方に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

言葉の働き	ア 言葉には、文化の継承，発展，創造を支える働きがあることを理解すること。
話し言葉と書き言葉	
漢字	イ 常用漢字の読みに慣れ，主な常用漢字を書き，文や文章の中で使うこと。
語彙	ウ 我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し，それらの文化的背景について理解を深め，文章の中で使うことを通して，語感を磨き語彙を豊かにすること。
文や文章	エ 文章の意味は，文脈の中で形成されることを理解すること
言葉遣い	
表現の技法	オ 本歌取りや見立てなどの我が国の言語文化に特徴的な表現の技法とその効果について理解すること。

(2) 我が国の言語文化に関する事項

(2) 我が国の言語文化に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

伝統的な 言語文化	ア 我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解すること。 イ 古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解すること。 ウ 古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまり、古典特有の表現などについて理解すること。
言葉の由来や 変化, 多様性	エ 時間の経過や地域の文化的特徴などによる文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解すること。 オ 言文一致体や和漢混交文など歴史的な文体の変化について理解を深めること。
読書	カ 我が国の言語文化への理解につながる読書の意義と効用について理解を深めること。

※ 指導事項の解説

ア 我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解すること。

「我が国の言語文化の特質」とは…

我が国の言語文化の独自の性格やその価値のことであり、微視的には作品一つ一つに表れた個性と価値、巨視的には作品を集合的に捉えた時代全体の特徴、さらに近現代につながる我が国の言語文化全体の独自性のことである。ここでは、我が国の言語文化として重要な位置を占めている古典や近代以降の文章を読み、それぞれの時代や社会の姿、その中で言語文化を生み出した人々のものの見方、感じ方、考え方に触れることを通して、生徒が我が国の言語文化の特質を理解することを求めている。

我が国の文化と外国の文化との関係を取り上げているのは、我が国の言語文化の特質を理解するに当たって、中国など外国の文化との関係が重要だからである。我が国は中国の文化の受容を繰り返しつつ独自の文化を築き上げてきた。その経緯を踏まえ、古文と漢文の両方を学ぶことを通して、両文化の関係に気付くことが大切である。古来、我が国は、文字、書物を媒介にして、多くのものを中国から学んだ。その結果、漢語や漢文訓読の文体が、現代においても国語による文章表現の骨格の一つとなっている。漢文を古典として学ぶことの理由はこの点にもある。(中略)

現代社会ではグローバル化が急速に進展しているが、その中にある我が国の言語文化の独自性と価値を知り、我が国の文化と外国の文化との関係について理解することが、これまで以上に重要となっていることを認識する必要がある。

※ 指導事項の解説

イ 古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解すること。

「古典の世界に親しむ」とは…

古典の世界に対する理解を深めながら、その世界を自らとかけ離れたものと感じることなく、身近で好ましいものと感じて興味・関心を抱くことである。作品や文章に関する歴史的・文化的な情報などを単なる断片的な知識として理解するのではなく、作品や文章に対する影響を与えたものとして理解することを通して、古典の世界のもつ豊穡さや魅力に気付かせることが重要である。

「作品や文章の歴史的・文化的背景」とは…

作品や文章について、その著された時代が我が国や外国の歴史の中でどのような時代に位置し、また、当時の生活様式や社会制度、人々の価値観、人生観、美的観念などがどのような特徴をもっていたのかなどの事柄のうち、その作品や文章の成立に影響を与えていると思われる事柄を指す。この中には、作品が成立した舞台などの地理的状況や書き手の置かれていた状況といった作品成立の背景なども含まれる。

「言語文化」の内容 ②〔思考力、判断力、表現力等〕



A 書くこと

(1) 書くことに関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

話題の設定、情報の収集、内容の検討	ア 自分の知識や体験の中から適切な題材を決め、集めた材料のよさや味わいを吟味して、表現したいことを明確にすること。
構成の検討、考えの形成、記述、推敲、共有	イ 自分の体験や思いが効果的に伝わるよう、文章の種類、構成、展開や、文体、描写、語句などの表現の仕方を工夫すること。

B 読むこと

(1) 読むことに関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

構造と内容の把握	ア 文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えること。
精査・解釈	イ 作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈すること。
	ウ 文章の構成や展開、表現の仕方、表現の特色について評価すること。
	エ 作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めること。
考えの形成 共有	オ 作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えをもつこと。

※ 指導事項の解説

オ 作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えをもつこと。

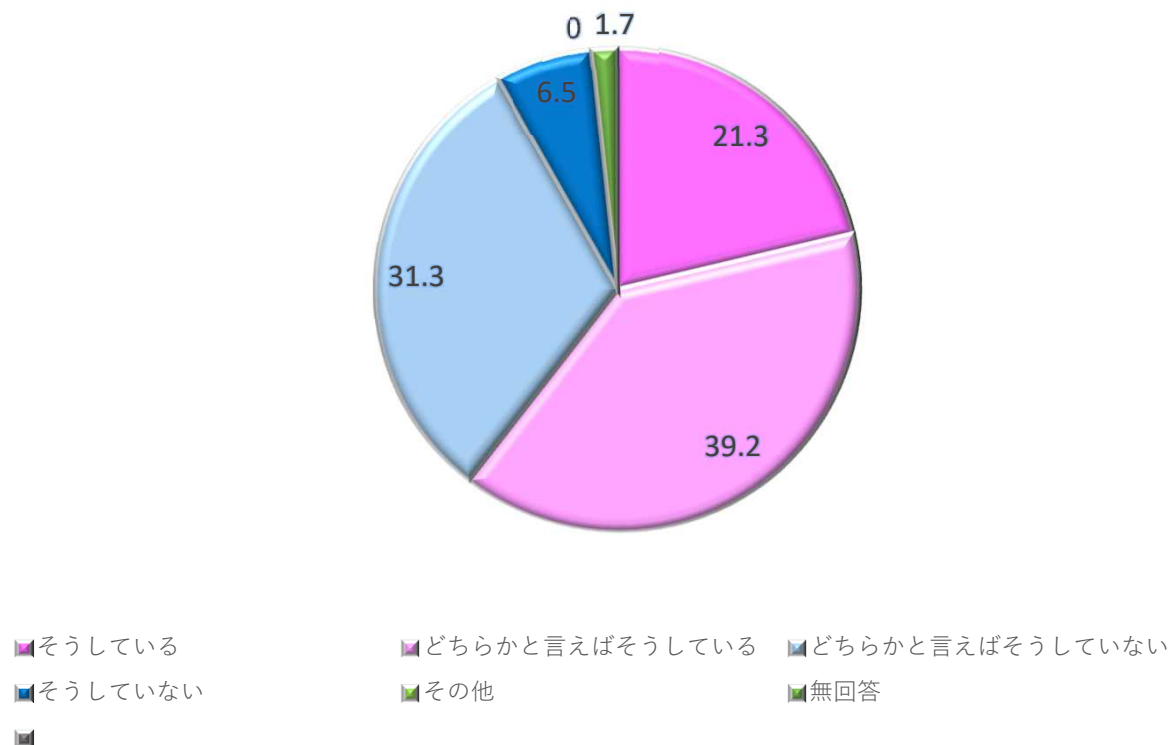
読む対象とした作品の内容や解釈を踏まえ、それを自分と関係付けて、自分のものの見方、感じ方、考え方を深めることを目指している。このことは、作品を読み深めて、単に内容を捉えたり解釈を深めたりすることにとどまらず、自分が対象をどのような視点、観点、立場によって、どのような感性や感情をもって、どのような認識や解釈の仕方によって捉えるかという、対象に対する向かい方自体の深まりを意味している。「言語文化」において読む対象は、伝統や文化の厚みの中で形成された対象へのものの見方、感じ方、考え方を基底として編み出され、磨き抜かれた言葉によって成立している。こうした言葉が含みもつ豊かで深遠な意味や内容世界に深く関わり、対象への認識の仕方やそれを感じ受する姿勢が充実することを示している。

我が国の言語文化について自分の考えをもつとは、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、上代から現代にわたる様々な作品や文章に表された内容やものの見方、感じ方、考え方などを尊重すべき文化的価値として認識し、我が国の言語文化を継承していく一員として、我が国の言語文化についての自分なりの考えをもつことを指している。生徒が、上代から現代に至る多種多様な価値ある作品や文章に触れ、それらに親しむことを通して自己を見つめ、我が国の言語文化の担い手として、未来に向けて自らのあるべき姿を展望することにつながることを期待される。

平成27年度 学習指導要領実施状況調査 教師質問紙調査



古典に親しめるよう指導している



「古典に関連する近代以降の文章を取り上げるなど、古典に親しめるよう指導している」について、「そうしている」と答えた教師の割合が21.3%、「どちらかと言えばそうしている」と答えた教師の割合が39.2%で、合わせると60.5%の教師が、生徒が古典に親しめるように工夫していると回答している。

※ 学習指導要領の解説

4 内容の取り扱い (1) 内容における授業時数

イ 「B読むこと」の古典に関する指導については、40～45 単位時間程度を配当するものとし、計画的に指導するとともに、古典における古文と漢文の割合は、一方に偏らないようにすること。その際、古典について解説した近代以降の文章などを活用するなどして、我が国の言語文化への理解を深めるよう指導を工夫すること。

古典における古文と漢文との授業時数の割合に関しても、一方に偏らないようにすることとしている。例えば、古文のみに多くの時間をかけたり、その取扱い方に深淺が生じたりすることがないように配慮し、全体として両者をバランスよく指導する必要がある。

その際、古典について解説した近代以降の文章などを活用するなどして、我が国の言語文化への理解を深めるよう指導を工夫するとは、古典としての古文と漢文に関する指導の際に、古典について解説した近代以降の文章や、古典について書かれた随筆、古典の現代語訳などを活用するなどして、古典への抵抗感を軽減し、我が国の言語文化への理解を深めるよう指導を工夫することを指している。これは、答申で指摘された「古典の学習について、日本人として大切にしてきた言語文化を積極的に享受して社会や自分との関わりの中でそれらを生かしていくという観点が弱く、学習意欲が高まらない」という課題の解決を図るための工夫であり、古典の原文のみを重視することのないよう配慮が必要である。

※ 学習指導要領の解説

4 内容の取り扱い (4)教材について

ア 内容の〔思考力, 判断力, 表現力等〕の「B読むこと」の教材は, 古典及び近代以降の文章とし, 日本漢文, 近代以降の文語文や漢詩文などを含めるとともに, 我が国の言語文化への理解を深める学習に資するよう, 我が国の伝統と文化や古典に関連する近代以降の文章を取り上げること。また, 必要に応じて, 伝承や伝統芸能などに関する音声や画像の資料を用いることができること。

その上で, これらに日本漢文, 近代以降の文語文や漢詩文などを含めることを示している。日本漢文, 近代以降の文語文や漢詩文などは, 教材選定に幅をもたせ, 教材を具体的にイメージしやすくするために例示している。日本漢文とは, 上代以降, 近世に至るまでの間に日本人がつくった漢詩と漢文とをいう。これは本来, 古典としての漢文に含まれるものである。我が国の文化において漢文が大きな役割を果たしてきたことや, 日本人の思想や感情などが漢語, 漢文を通して表現される場合も少なくなかったことなどを考え併せると, 日本漢文の適切な活用を図る必要がある, ここで改めて示している。近代以降の文語文や漢詩文は, 時代的な範囲では古典に含まれないが, 近代以降にあっても, 古典の表現の特色を継承した優れた作品や文章などがあり, 科目の性格を踏まえた上で, ここで改めて示している。加えて, 科目の性格を踏まえた上で, 我が国の言語文化への理解を深める学習に資するよう, 我が国の伝統と文化や古典に関連する近代以降の文章を取り上げること, ここで改めて示している。我が国の伝統と文化や古典に関連する近代以降の文章とは, 我が国の伝統と文化に関連する近代以降の文章, 古典に関連する近代以降の文章のことである。前者には, 例えば, 我が国の伝統や文化について書かれた解説や評論, 随筆などが, 後者には, 例えば, 古典を翻案したり素材にしたりした小説や物語, 詩歌などが考えられる。

(「高等学校学習指導要領 (平成30年告示) 解説 国語編 」 P139～140) より抜粋

※ 学習指導要領の解説

4 内容の取り扱い (4)教材について

イ 古典の教材については、表記を工夫し、注釈、傍注、解説、現代語訳などを適切に用い、特に漢文については訓点を付け、必要に応じて書き下し文を用いるなど理解しやすいようにすること。

古典の教材としての古文と漢文を理解しやすくし、親しみやすくするためには、学習に際して読みにくい漢字や熟語に読み仮名をつけたり、難読な部分には、注釈、傍注、解説、現代語訳などを適切に用いたりする配慮が必要となる。言うまでもなく、古典の学習において原文は尊重される必要がある。したがって、例えば現代語訳などを取り上げるにしても、おのずと適切な範囲はあり、原文との関わりにおいて取り上げることが大切となる。具体的には、原文と対比できるよう現代語訳などを取り上げたり、原文の前後を現代語訳などで補ったり、原文と同一の文種や形態に属する他の文章や作品を現代語訳などで取り上げたりすることなどが考えられる。このように、現代語訳などを活用しつつ、それらを通して、古典そのものに対する興味・関心を広げていくよう配慮することが大切である。

■ 訓点とは、返り点、送り仮名、句読点など漢文を読みやすくするために古来工夫されてきた符号である。

■ 漢文は国語科の古典の一分野として取り扱うものであり、訓点をつけて読みやすくする必要がある。書き下し文は、生徒の実態や指導の段階などを考慮して効果的に利用することが大切である。

■ 古典を読み味わうためには、古典を理解するための基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けていなければならないことは言うまでもない。しかし、従来その指導を重視しすぎるあまり、多くの古典嫌いを生んできたことも否めない。そこで、指導においては、古典の原文のみを取り上げるのではなく教材に工夫を凝らしながら、先人のものの見方、感じ方、考え方に触れ、それを広げたり深めたりする授業を実践し、まず、古典を学ぶ意義を認識させ、古典に対する興味・関心を広げ、古典を読む意欲を高めることを重視する必要がある。そして、そのような指導を通して、古典を理解するための基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けさせていくことが大切である。

各科目の「内容取り扱い」に示された各領域における授業時数



平成21年告示の学習指導要領における必修科目

	話すこと・聞くこと	書くこと	読むこと＋〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕
国語総合	15～25単位時間程度	30～40単位時間程度	※古典と近代以降の文章の割合はおおむね同等、古文と漢文は一方に偏らない。
計	15～25単位時間程度	30～40単位時間程度	

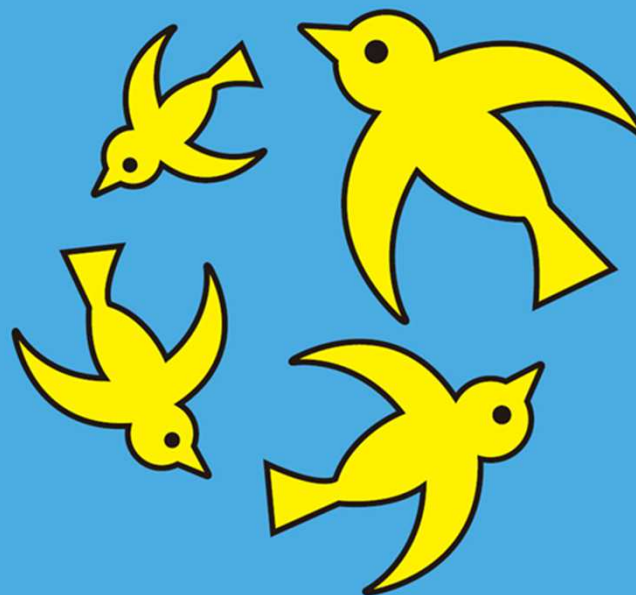
平成30年告示の学習指導要領における必修科目

	話すこと・聞くこと	書くこと	読むこと
現代の国語	20～30単位時間程度	30～40単位時間程度	10～20単位時間程度
言語文化		5～10単位時間程度	【古典】 40～45単位時間程度
			【近代以降の文章】 20単位時間程度
計	20～30単位時間程度	35～50単位時間程度	70～85単位時間程度

新しい学習指導要領

生きる力

学びの、その先へ



御静聴ありがとうございました。